素人淨瑠璃の名手

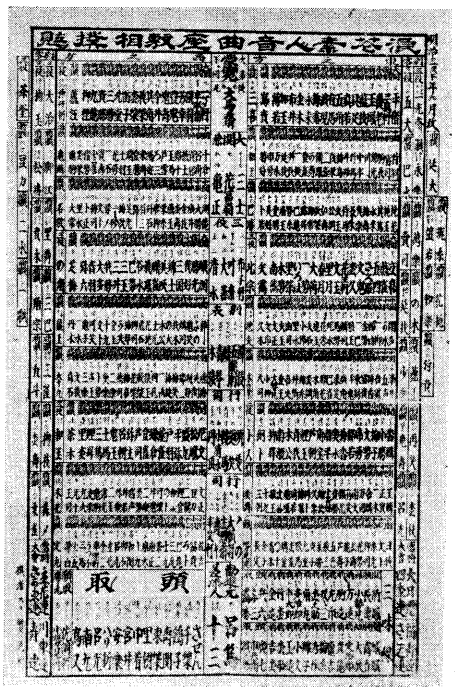
玄人も教へを乞ふた

◇

元祖の義太夫を始め、素人から斯道へ入つて天晴れ名を揚げた人は、殆ど數へ切れないほどあるが、明治前後、本業の外の道樂として、純粹の素人でありながら、而かも玄人を指導するやうな位置にあつて、斯道を睥睨してゐた大天狗が可なり澤山ある。ちよい〳〵その高鼻をつまみ出して見やう。

◇

堂嶋の相場師、炭小太、といふ名は玄人の太夫も恐れを爲した名である。名人團平、松葉屋廣助（五代目）さへもコツソリと此人の教へを受けた。名優梅玉歌右衛門の吃又を見た炭小太が、――巧いには巧いが、花道の出からして吃にはなつてゐない、聾のやうだあんな吃り方をしては、終には本物の吃になつてしまはねばなるまい――と云つた。これを聽いた梅玉も、胸にこたへるところがあつた。そこで翌朝すぐ堂嶋の炭小太を訪ふて、ひき吃の稽古をつけて貰つたといふ話がある。



附番三年素人淨瑠璃大

◇

この炭小太に學んだ、道修町の藥種屋、鹽野藤兵衛、十三（とさん）も名人の一人で、十三歳から淨瑠璃を始めたので十三と號するのだと云ふ非常に惡い聲の人だが、その難聲を巧みに用ひわけた情味の語り手で、攝津大掾の越路時代には此人に教へられるところが多かつたそうだ。

◇

素人の長門と呼ばれた長門の弟子の呂篤といふ人がある。美聲の大音で有名な人。その他では、堂嶋の尼文、堀江の泉又、チヤリ語りの半眼齋、一弓軒、蟻松、千倉、一光齋、文福、車樂齋、三士、等から、角屋、大馬齋、花富、龜正、平猪、立花、蟻洞、戸石、香鱗、三鳥軒、勝光、小勝、松風、大治、が明治初年かけかけて素人界を賑はしたものである。

◇

かういふ流れを受けて、ずつと近くでは、上手とまでは行かないまでも、決して下手ではなかつた所謂旦那藝の紳士淨瑠璃といふのが、各所に團體を作つて現はれた。市の戸長連の組織した――戸長連――といふ洒落た會には、谷新助、小寺德兵衛、大垣市郎兵衛など、知名の士があり、住友の柱石廣瀨宰平や、土居通夫、田中市兵衛、增田信行、渡邊庄助諸氏の起した――素技の木會――がある。その他一流紳士の間では、秋月淸十郎、緒方正淸博士、桐原捨三氏など聞こえたものだ。長尾太夫の自叙傳にあるやうに、鴻池善右衛門氏も松若の號で語り、吉野五運氏も臟王（自家製藥五臟圓の替名）で現はれてゐる。

◇

土居通夫氏の忠臣藏喧嘩場は大豪聲で大に堂に入つたもので、社交界では『土居さんの嘩喧場』で通つてゐた。田中市兵衛さんのは錆のある聲で澁いものが巧かつた。廣瀨翁の忠臣藏九段目に至つては約二時間大いに樂しんで語るので有名。著者が銀行の小僧時代、同氏の須磨の別邸で、二の膳つきの御馳走を頂きながら、半ば居眠りながら、聞かして貰つたやうなこともあつた。

◇

惣じて素人方のかうしたお道樂にも、その以前は、なんとなく上品な雅味があつて、鷹揚な床しい味があつたものだ。

（承前）苟も我が同盟淨瑠璃之業仲間の業に於けるも此盛擧の一端を二つながら兼ねるものと云ふべし如何となれば孝子忠臣の外傳を演じて勤勉の心を起さしめ高山流水の秘曲を奏して快々の樂しみを盡さんは其事卑俗と雖も豈に勸懲の一端と云はざるを得ん故に今同盟共同して苟くも淫奔を談ぜず醜態を演ぜず人をして義理人情のあるところを知らしめ併せて衛生の一つに供し各自の言行に於ても浮薄を戒め勤愼實直ならんことを欲して此規則を設け商法會議所の公認を經て左の條々を約す